

WUC2022を踏まえた今後の危機管理と遠征チームのあり方について

公益法人日本オリエンテーリング協会
競技力向上業務執行理事 鹿島田浩二

2022年の世界学生選手権は、オリエンテーリングの先進地スイスにて開催され、日本から12名の選手、2名のチームオフィシャルで参加しました。結果については報告にあるとおり、スプリントリレーで日本の代表チーム史上最高である10位を記録するなど、昨今の学生世代選手の成長を感じさせる素晴らしい結果でした。今回の成果は学連に所属する多くの後輩学生に世界を目指して競い得る可能性を示す、とても大きな意義のある結果だったと感じています。

一方で、チームオフィシャルと一部選手の報告にもある通り、新型コロナ対応に関して大きな課題が残る遠征でもありました。現地で新型コロナのPCR陽性者が出たことにより、出場を断念するなど、長い間準備した結果を見ることなく無念な想いをした選手を生んでしまいました。また、体調不良や帰国時検査の陽性判定により帰国予定を変更する者が出るなど、現地チームに大きな混乱が生じました。

この点については、大会期間中から、日本学連を通じてJOAも事態を把握し、適宜現地と連絡をとって対応してきましたが、現地の一般的な感染やその対応に関する状況の把握が難しい中で、日本と現地のコミュニケーションは必ずしもうまくいきませんでした。そのため、現地の選手・チームオフィシャルが難しい判断と行動を迫られることとなり、結果的に、現地チームに過重な負担をかけてしまいました。その原因としては、事前の感染対策、感染者あるいはその疑いのある選手への対応、それに関わる指揮系統の構築などが不十分であったことが考えられ、派遣主体として大変申し訳なく、反省しています。

JOAとしては、今回の件全体を、代表チームの派遣に関わる組織的な体制の不備に原因があったととらえ、これまで、事実の把握と問題点の分析を行ってきました。その結果として、今後の代表チームの派遣に関して、以下の組織的改善が必要であるとの結論に至りました。

- 1) 従来日本学連が派遣主体であったWUCについて、JOA主体の派遣に切り替え、その他の年代の代表(WOC・JWOC)と同一の管理体制におくこと。
- 2) 代表チームの派遣に際しては、事前に国内の責任者(各競技の委員長)とチームオフィシャルの役割を明確化すること。また、感染症対策も含めた海外渡航時のチーム危機管理体制を整備し、マニュアルを作成すること。
- 3) JOA、選手、チームオフィシャルそれぞれの使命、責任、権利について、代表チームの関係者でコミュニケーションを重ねていくこと。
- 4) 代表選手・チームオフィシャルに対するインテグリティ教育を実施し、競技への取

2023年4月15日

り組みはもちろん、オリエンテーリングという競技の多面的な価値について選手と関係者が理解を深めていくこと。

これらの対応は、JOA内で整理の上、2023年度から逐次実施する予定です。

JOAはスポーツの中央組織（またはNational Federation）としては小さな団体で資金面、人材面でも制約があり、大きなスポーツ団体のような日本選手団の手厚い支援は厳しい状況にあります。しかし、それを踏まえた上で、できる限りの支援を検討していくことが大切であり、今後の遠征では、選手、チームオフィシャルがより安心して競技に専念できる体制を作っていきたいと考えています。

今後、代表チームを目指す皆さんには、遠征前、遠征中の健康管理に普段以上に留意し、自身のみならずチーム全体がベストな状態で競技に臨むことができるよう自己管理をしてほしいと思います。また、同じ競技会に関わる者として、チームメイトはもちろん、他チームの選手、大会役員へのリスペクトと配慮を忘れないでください。そして、日本を代表するトップアスリートとして、その誇りと自覚を常に持ち、フェアプレイはもちろん、実力的にも、人格的にも、後に続く後輩たちの手本となる選手であってほしいと願っています。